



図書館の
幽霊

川崎ゆきお

「霊長類って、やはり霊が入っている生物ですかねえ」

図書館のロビーで、金田は賢者のような白く長い顎髭に話しかける。

「霊入りと、霊なしがいるんでしょうかねえ」

白髭は答えない。

「あのう」

「あ、私ですか」

「そうです。ちょっと聞きたかったのです」

「あ、独り言かと思っていました」

「いえ、霊について疑問が起きましたもので。さっき本を見ていたのですが、怪しげな心靈書はあるのですが、心靈現象の話ばかりで」

「それは、形而上学の世界です」

「はあ」

「想像の世界です」

「そんな難しい話じゃなく、霊長類って何ですかね。霊が出てきますよ」

「漢字で、そう当てたのでしょうかねえ」

「霊の長者ですか」

「あはは、そうですねえ。霊に長けた生物。ここでは動物ですが、猿なんかも含まれるんじゃないですか。よく知りませんが」

「一寸の虫にも五分の魂って言うじゃありませんか。虫にも入っているんですよ」

「魂と、霊とは、また違うのかもしれませんが」

「猿と、犬や猫とはどう違うのでしょうか」

「はあ」

「ご存じない？」

「はい」

「犬猫には霊は入っていないのですか」

「あるでしょ」

「そうですねえ」

「まあ、猿は人類の系譜なので、霊長類って言うんでしょうねえ」

「ああ、なるほど」

「で、どうして、そんなことを」

「人間って、霊なんですよ。これって、靈魂を認めていることになりませんか」

「ならないと思いますよ。ただの言葉です」

「霊前に報告するとか、誓うとかがあるじゃないですか」

「ありますねえ」

「あれは何ですか」

「それ以上のものじゃないですよ」

「ほう、乗ってきましたなあ」

「え、何がです」白髭はどきりとする。

「霊の話に乗ってこられたと言っただけですよ」

「ああ、そうですか」

「まさか、あなたは幽霊ではないのですか」

「違いますよ」

「私は、この図書館ロビーに毎朝来て、新聞を読んでいます。来る人はみなさん常連で、ロビーのソファの位置まで決まっているんです。あなたは一度も見た覚えがありません。しかも目立つ白く長い顎髭ですよ」

「私は今朝始めて来ただけです。この町にも立派な図書館があると」

「なるほど」

「あなたは私が幽霊だとすれば、どうなんです」と白髭が聞く。

「どうなのとは」

「本物の幽霊だとすれば、どうするおつもりですか」

「ああ、それは、まだ考えていませんでした」

「本当にそうなら、あなた、大変な経験になりますよ」

「ああ、はい」

「それよりも」

「何ですか、白髭さん」

「ここの図書館、もう閉鎖されて、かなり経っていたとしたら、いかがです」

「つまり、そうなると、二人とも幽霊。いや、ここの人達も」

「はい」

金田はあわてて立ち上がり、図書館を出た。中庭に出ると、蝉時雨。その脇にある自転車置き場には、金田の自転車もある。いつもと変わらない。

ロビーに戻ると、白髭はまだいた。

「いましたか」

「幽霊じゃないですよ。私は」と白髭。

「私もだ」と金田。

「霊長類の話、続けますか？」

「いや、もういいです。白髭さん」

「図書館も無事でしたか」

「閉鎖などされていませんよ」

「それはよかった」

「しかし、一瞬、冷やっとなりましたよ」

「幽霊が見えないのは霊長類だけかもしれませんねえ」

「また、おかしなことを」

「いえいえ」

「私の友人で幽霊や、怪しげなものをよく見る奴がいるんです。それで調べていたんですよ。霊

関係の本を」

「そうですか、お大事に」

そこへ一人の男が入ってきた。

「先生」

白髭を呼んでいる。そして、近付いてきた。

「こんなところで、さぼっていたのですか。幽霊屋敷の取材を始めないと、もう行きますよ」

白髭は渋々立ち上がった。

了